

“Edification” and “Solidarity” : “Practice” Oriented Text in a Local Circulation Magazine for Training Writing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木戸, 雄一 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6856

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



「教化」と「連帯」

― 地方文章回覧誌における「実践」志向のテキスト ―

木 戸 雄 一

【キーワード】 地方文学、回覧誌、文章会、結社、青年

一 はじめに

福島県耶麻郡関柴村で一九〇〇年前後に活動していた「作文会」^{〔1〕}「文学攻究会」は、地域の高等小学校卒の青年男子によって文章力の向上を目指し結成された会であった。入学試験を通過したことからくる選良意識や寄宿生活などを通じて同質性を高められる中学校卒とは異なり、彼らは地方名望家層の子弟という階層的同一性がありながら、決して均質な教養やリテラシーを持ってはいなかった。前稿では、回覧誌、会員個人、そして彼らが書く文章の内部において、「訓詁」「実践」「秩序」「遊び」といった異なる志向が併存していることを指摘した。そして、文章回覧誌が、余白に書き込まれる評を通じて双方向的なメディアであったがゆえに、文章は常に対話的な場へと引き出されることになった。それは、書かれた文章が会員に何らかの働きかけをする可能性があるということであり、余白に書き込まれた批評とのやりとりも含めて、会員の変化をうながす因子となり得るということでもあった。

文章による他者への働きかけという点に着目して、「作文会」^{〔2〕}「文学攻究会」を見ると、語義を辞書や文献に遡って確定しようとする「訓詁」志向の会員は、ありうべき「正しい文章」を書くことに固執し、会員間に古典に関する文化資本の格差に基づいた、「教える」側と「学ぶ」側の垂直の関係を生み出した。一方、「実践」を重んじる会員はそのような文化資本の格差を無効化しようとし、それに代わる人間関係を提案しようとした。しかしそれは、新たな格差を前景化したり、「実践」を強調することでその格差を各人の努力によって克服すべきものとする文章を生み出すことになった。「実践」志向の会員の文章によって人間関係のモデルや、その中でのあり得べき人間像が示され、実際の会員間の関係や会員個人のありようと葛藤することになったのである。

本稿は、「作文会」「文学攻究会」の中で、強い「実践」志向を持った二人の会員に着目し、その文章の特徴と回覧誌の中での作用について考察する。本稿で取り上げる二人の会員とは、前稿で「実践」志向の会員として言及した、宇津木忠次郎、忠介の兄弟である。二人は知識を「実践」することを強調していた。しかし、同時に二人はその境

「教化」と「連帯」

遇に起因する教養とリテラシーの違いによって、異なる方向性と特徴を持つ文章を書くことになった。本稿では一九〇〇年代の地方文章回覧誌における「実践」志向の論理と文章の特徴を明らかにするとともに、会員との対話的関係の中から浮かび上がる地方青年の間の分断と格差を読み取りたい。

二 地方滞留と農本主義

「作文会」には宇津木姓の会員が数名いるが、そのうち忠次郎（号は錦龍生・柳福山人など）・忠介（忠助とも、号は飄遊生、のち椿堂）・定衛（号は柳月庵など）の三名は兄弟であり、また多一（多市とも、号は香雪）はその縁戚であった。この四名は「作文会」「文学攻究会」の活動に積極的に参加し、回覧誌にも多くの文章を投稿している。

長兄の忠次郎は、四人の中では最も早く「作文会」の会員になった。会費の徴収が記録され始める一八九八年一〇月には、すでに会員として名を連ねていた。しかし、彼が文章を投稿したのは同年一二月二五日発行の『文の千草』八号が最初である。

余は田舎之一農子文盲無智の徒にして取るに足らざる一寒生なり性甚だ雑誌を嗜む雖然未だ一誌を購読するを果さざりし偶過日第二師団へ入営せられし菊池研介君の勧告を容れ今や本誌を愛読し親愛なる聡明秀才なる諸君の学才を見ゆるを得たるは不肖錦龍生が光榮とする所なり諸君余が魯鈍なるを笑はず懇ろに高教を垂れ賜へ余業務に羈され一分閑暇なく入会以来一之寸文をも投書せざりしが次号よりは勇筆揮ふて玲燿たる文章を掲載せん諸君一致共同じて益々之を振張し本誌之隆盛を養生せずして可ならんや余此先導者たらん諸君寸時も猶予せずして勉められん事を仰望く

「農子」とあるように忠次郎は農業に従事しており、それは会員名

簿にも記されている⁽³⁾。おそらく家作を引き継ぐ立場にあったと思われる。また、次弟の忠介や末弟の定衛には漢学塾への入塾歴があるが、忠次郎は不明である。しかし、「雑誌を嗜む」ことや前稿で分析した菊池研介との「訓話」をめぐるやりとりなどを見れば、少なくとも高等小学校卒業程度のリテラシーは備えていた。会の創立者である菊池が入会を勧めたのも、忠次郎のリテラシーをある程度見極めていたからであろう。

引用の後半は、その後の忠次郎の文章の片鱗がうかがえる。会員に対して「一致共同」して雑誌の「隆盛」を呼びかける点や、「寸時も猶予せずして勉められん」と力行を求める点などである。また、「玲燿たる文章を掲載せん」という一節をめぐっては一波乱があった。自作の文章に対して「玲燿たる文章」と形容したことについて、会員の桃源楼主人から「うのぼれ」と評されたのである。それに対して、忠次郎は次のように反論した。

余考心するにうぬぼれとは自分がわるいことでも自分の及ばないことでも「なあに」といつて負けをしみややせ我慢をなす者を云ふでは有りませんか余は此自惚根性は文中に少しもありませんまい
モシあり升た事ならば何卒次号には教示を願ふ

（錦龍生（宇津木忠次郎）「余文の千草第八号を見て大立腹」『文の千草』一一号、一八九九年二月一日）

忠次郎は自分の誤用には言及しない。その一方で自己の文章中に「うぬぼれ」に当たるものがあるかと、倫理的な問題に置き換えて問い返している。「うぬぼれ」の語義も「自分がわるいことでも自分の及ばないことでも「なあに」といつて負けをしみややせ我慢をなす者を云ふ」と、具体的な行為に翻訳することによって、辞書的な汎用性を欠いた解釈になっている。語義をふまえているようでありながら、語の適切な用法という「訓話」レベルの問題ではなく、語義から導き出さ

れる倫理的な「実践」の問題として反論している。忠次郎にとつては、言葉が実際の行動と不即不離であることが重要だった。彼はよい文章の条件について、次のように述べている。

然らば吾人の断じて之を信じ好文章と云ふ所の者果して何等の点を指すか他なし文句了々主意徹貫然も誠意迸出吾人たるもの宜敷実践躬行し得るもの之を真の文章と云ふ実に文章家の本領といふべきなり若し夫れ詞句奇を極むと雖其説や崑蕩的にして確固ならざらんか主意不明決して一章の何たる知らざるなり之れ豈文章家の本領ならんや若し又字句鍛錬所論共に妙を致すと雖浮誇的にして実践躬行し得ざらんか其文や取るに足らざるなり

〔「文章家の本領」『文の千草』三八号、一九〇一年八月一日〕

忠次郎が「好文章」とする「主意徹貫然も誠意迸出」する文章とは、論の主旨が明確で虚偽がない文章ということであろう。文章がそのような条件を備えなければならぬ理由は、その内容を「実践躬行」しなくてはならないからである。ゆえに彼は「詞句奇を極む」文の「主意不明」を批判し、「字句鍛錬」した文も「浮誇的」で「実践躬行」できなければ取るに足りないとして述べている。修辭は「実践」に寄与しない場合は「本領」から逸脱したものととらえられている。

では、忠次郎は、どのようなことを「実践躬行」すべきと考えていたのだろうか。

人間ははやく世の中に出て名をあらはし大事業をなさんとして十分の素養もなきにさわぎだすは間違に御座候兎角当地の人は其くせなき様に御座候何事も要するにあまりいそがざるが得策かと存候(求むるものは与へらるべし)神はたしかに一生つまらぬものに御身等をくさらす事は之あるまじく確き信仰をもて安心して感謝しつゝ家業をつとめらるゝ様□居り候日新文明の今日汽車の音さ

「教化」と「連帯」

へきかれざる閑柴村にひきこもり朝からばん迄土の上をこね居るは一時はつらきものと思ふ人も之れあるべく候へ共此れあまりに神を信ぜず自分其自身を信ずる事うすきものに御座候

〔「文の千草」三七号、一九〇一年七月一日推定〕

『文の千草』三七号は忠次郎が編集員だったが投稿が集まらず、彼一人の文章で発行にこぎ着けた。それがはからずも論説文を中心に彼自身の主張を集中的に文章化する機会になった。この文章では、立身出世の功名心に駆られて「素養」のないまま出郷することが戒められている。彼の文章は、単に自己の主張を論理立てて披瀝するものよりも、読み手への呼びかけを意識したものが多く、この文章も「文章の読者があらかじめ想定され、それに向かって呼びかけるような体裁」としての候文体で書かれている。興味深いのは「(求むるものは与へらるべし)」「神」という、キリスト教を意識した言葉が見出せることであり、閑柴村に滞留している青年に対して、「神」が彼らの一生を見捨てる事はないと呼びかけている。さらに、地方に滞留して農作業することへの不満に対しては、「神を信ぜず」「自分自身を信ずる事うすき」としており、将来の打開を約束する「神」とともに、そのような「神」を信じて現在の家業をひたむきに務める「自分自身」を信じる自持が必要とされる。立身出世主義の中で出郷の機会を得ることができない青年たち、その一人が長子として農業に従事せざるを得なかった忠次郎本人だが、そのような境遇を耐え忍ぶとともに、将来の出郷を含めた飛躍への可能性を曖昧ながらも否定しないために、「神」が見出されている。そして、忠次郎の文章は次のように続く。

上に慈愛の天父ましまし玉ふいつまでもえんの下の力もちのみをさせおくものにあらずしかし現在の忍耐辛苦が後來道を開き果を結ぶの根本高きにのぼるはし（編者）ごと心得樂しみてはたらきなさるべ

く候事は誠に大切に御座候事はすべて樂天的に急がずやまず忍耐するが肝要に御座候

忠次郎は関柴村に滞留する者たちに、「慈愛の天父」の愛による救済の可能性をほのめかす。「現在の忍耐辛苦をはしご」と心得て、成功を夢見ながら「樂天的に急がずやまず忍耐する」という行動指針は、滞留の境遇を成功への前段階と見なす。この論理自体が、成功と出郷を望みながらも果たすことができない地方青年の引き裂かれた心境の生々しい表現でもあろう。彼が「神」「天父」を持ち出す文章は、キリスト教の教義を通して理解するよりも、彼が置かれた地方青年としての欲求と諦念の表現として見た方が理解しやすい。

キリスト教の影響に関しては、宇津木兄弟の伯父である異色のキリスト教伝道者宇津木勢八（一八七一年～一九四一年）の影響が考えられる。宇津木勢八は、福島尋常師範学校卒業後、福島女子師範学校教員などを経て、東京で組合教会の海老名弾正から洗礼を受けた。その後、伊藤博文、大隈重信、渋沢栄一などの後援を受けた押川方義、本多庸一らが設立した大日本海外教育会の朝鮮進出拠点となった「日語学校」京城学堂に移り、組合教会の渡瀬常吉の下で、日本人唯一の教諭として実務をほぼすべて取り仕切っていたという。しかし、勢八は一九〇〇年二月にキリスト同盟会の乗松雅休と交流を始め、一九〇三年一月に組合教会を離れて同会に合流する。この会はプリマス・ブレズレンのグループで、聖書を拠り所にした信者の自主的な集会であり、教義に基づく教派的組織にこだわらない信者の水平的なつながりを基盤としていた。それゆえに、キリスト同盟会は、海老名や植村正久らが経験した、キリスト教の神の愛と、天皇や主君の愛との間の厳しい教義的な論争を通過することなく、「きわめて単純な福音をひたむきに説く無教派主義集団」として、会員を横断的に獲得していった。そこでは教義の代わりに、聖書の解釈に基づいたひたむきな行動の「実践」が前景化する。その代表的存在が、朝鮮民衆の中に入り込ん

で伝道し、没後に朝鮮の人々によって碑を建立されるに至った乗松であろう。乗松の伝道を助けたのが勢八だった。しかし、一方で教義の徹底を素通りしたということは、既存の道徳的規範を問い直すことなく、キリスト教の信仰へと形を変えてしまう可能性もある。

例えば、忠次郎は「こは伯父勢八氏渡韓の際忘れたる手帳中より見出し、ものなり」として、次の断想を紹介している。

- ・ 博学は高く飛んで囀々歌ふ外何事をもなすなき雲雀の如きものにあらず寧ろ鷹の如く天に飛翔するは真なりと雖も便宜と思ふ時には其餌食を捕へん為めに急下し得る処のものなり
- ・ 無能の士を高官に採用するは三個の不便あり一は公共の事務を害し二は皇室に不名誉を与へ三は有能の士の官職を盗取るものなり

- ・ 大事業は熱心なしに遂げられたることなし
 - ・ 怠惰は弱き心の隠れ場愚人の休日なり
 - ・ 四十は青年の終りたるもの五十は老年のわかきものなり
- (年代不明)

第一の文は知識の「実践」を是とするものである。第二は無能な人物が高位高官にある可能性を前提としており立身出世への道が閉ざされている地方青年の鬱積と認識を共有する。第三と第四は「熱心」の勧めと「怠惰」への批判であり、忍耐と力行の肯定である。第五はそれらの力行を可能にする「若さ」の持続についての認識である。立身出世主義の時代における上昇志向の青年の行動規範と総括できるだろう。これだけで勢八の当時の思想をすべてうかがうことはできないが、少なくとも、忠次郎は勢八のこのような言説に関心を寄せていた。

立身出世を目指す出郷熱を自他共に体感しながら、故郷にとどまることを余儀なくされた忠次郎は、地方滞留を道徳的優位へと読み替えようとする。

然り財産あり、美服あり、美酒あり、美妓ある者を唯一の紳士とし崇むる滔々たる世人よりすれば山間の農夫固よりその一顧だも値せざるべし然りと雖も吾人は未だ所謂貴顕紳士を羨んで山巾なる真個の平民を棄つること能はざるなりあ、山中の農夫よ爾が正直なる労働は此の世に於て尤も貴むべきもの否正直なる心と正直なる労働の汗とはこれ上帝の最も嘉みし玉ふ所なるぞ爾貴顕を羨むか紳士を慕ふか否々爾の心は清く爾の心は晴く爾の腸は潔し見よ彼等の富を（虚偽の舌もて得たる財は吹きはらはるゝ雲煙の如き）にあらざるや見よ彼等の美酒を（酒は人をして嘲らせこれに迷はさるゝを無智）にあらざるや而してまた見よ彼等の美妓を（妓は多くの人を傷けて仆せり彼れに殺されたる者多しその家はよみの途にして死の室に下りゆく）にあらざるやあゝ彼等をして貴顕たらしめ紳士たらしめし者は今や却て彼等をして地獄の刑罰に値せしめんとす

（『山家の農夫』『深山の花』一卷二号、一九〇二年二月二十五日）

この文章は「美文」として書かれたが、「農夫」に呼びかける形式がとられている。「山間の農夫」が正直な心と労働とに結び付けられ、「貴顕紳士」の富や虚偽と対比される。同時に「山間の農夫」は「平民」とされており、「貴顕紳士」との経済的格差が階級差ともとれる語彙で示されている。また、「山家」を明示しながらの対比は、「貴顕紳士」に「都会」も含意されていることを示唆する。地方を善、都会を悪とする二分法は、『穎才新誌』などの投稿雑誌でも早い時期から繰り返し見られる。それらにほぼ共通して見られるのが、都会を誘惑や墮落の温床としてとらえ、地方の単純で清廉なことを強調する図式だった。忠次郎の場合は「正直なる心と正直なる労働とはこれ上帝の最も嘉みし玉ふ所」と、キリスト教の「上帝」を持ち出すことによつて、地方青年の心性と労働の道徳性が保証される。一方、貨殖は不道徳なものとして地方生活ではあらかじめ断念されている。近世の報徳

「教化」と「連帯」

思想のような、地方の経済的自立を目指す経世的な思想との違いがここにある。それは地方と都市の経済格差を是認してしまふことでもあった。

慰めよ暑中家に在て働く平民よ□方等ハ却て天意に適ふ者なりかの貴族、紳商、宣教師の輩を羨む勿れ亦彼等を真似る勿れ天の職に従事する是れ休養なり我等ハ夏期なりと雖も避暑場に在て懶族と生涯を共にするを要せざるなり

（『文の千草』三七号）

避暑地（避暑場）という場所は階層的格差を象徴する場としてとらえられており、避暑地に集う階層と「平民」との違いは、暑中に労働するか否かである。暑中の労働を「天意」に適うものとし、避暑する階層を「懶族」と蔑視する。たとえ宣教師であっても労働しない者は否定する。労働を徳目としてとらえた上で、階層的な格差を道徳的な断絶に読み替えているのである。あるいはこの「宣教師」は避暑地に多かつた外国人宣教師を指しているのかもしれない。忠次郎は早くに「文明人論」で、西洋人が文明人を名乗りながらそれにふさわしい行動をしないことを糾弾している。「彼や口に「アーメン」を唱へ四海兄弟一視全人と称し却つて他邦人を凌辱し異宗人を軽侮す」というくだりには、たとえ「文明人」と目される人々でも、文明にふさわしい「実践」が伴っていないければ偽りの「文明人」であるという価値観を、忠次郎が持っていたことを示している。文明は行為として「実践」されなくてはならない。

ここまでの忠次郎の思想を要約すれば、地方に滞留せざるを得ないことから直面する地方と都会の経済的格差を、「正直なる心」の有無という道徳的格差に反転させ、労働や忍耐という行為を徳目化して「実践」しつつ地方にとどまろうとするものであった。

そして、忠次郎は地方における労働の中でも、自らが携わっている

農業をより高く価値付けようとする。

社会の状態は商工業は勃然として進歩するが如しと雖も独り我国の財源たるの農業は微々として振はず抑も我が神州の風土たるや氣候温和土壤肥沃五穀生長せざるなし（中略）農は国家の盛衰に関す諸士其れ愛国の情を以て農業を勉励し以て我邦の富強を計るべきなり

〔勸農論〕『文の千草』三七号）

忠次郎は日本が農業に適した風土であり、農業の振興こそが必要であるとする農本主義を主張する。珍しく呼びかける形式を取らないこの文章は、しかし単なる思弁ではない。これに先立って忠次郎は「近來青年農家が（中略）農業に従事するを厭ひ他の職業に転せんとするの傾向甚だ多き様に御座候誠に困り候事に御座候」（「無名十題」『文の千草』三一号、一九〇一年二月一七日）と、農業を担うべき青年の出郷を憂えていた。同郷の青年たちの出郷を引き留めるといふ具体的な懸案が、このような農業振興を国家レベルで論じる文章を書かせた。そして一方では、農業の具体的な効用を個人レベルで説く次のような文章を書かせる。

農家の楽しみ数ふれば一にして止まず然れども快樂の最も大なるものゝ一は軀軀の強健なるにあり晨には星を戴て出て終日力役夕には月を踏てかへる（中略）今や秋気天に満つ懶者早く起き歩を戸外に運べ空気清澄身神忽ちにして爽快云ふべからざるものあるを覚ふべし況んや鳥は疎林に鳴く自然の美一として耳目を洗ふに足らざるなきに於ておや此間に在て日々服役遠く俗界の紛擾を離れて胸中すこしの苦悶なく独り自ら天を樂しむ俗界の榮譽羨むに足らず（中略）農家が身体の強壯なる素より其所にして何れの代何れの邦に於ても最も長寿を保つものは農家にあるを常とするも

亦此故に外ならず農家の快樂や其一端を述ふるも此の如く大なり然るに茲に怪しむべきは近來青年農家か（中略）農業に従事するを厭ひ他の職業に転せんとするの傾向甚だ多きこと是れなり蓋し農家をして斯く転業の決心を起さしめたるには其原因種々あるべしと雖も余輩は滔々たる青年農家が此の一種の流行病に襲はれ居るを見て農業のため否な国家のため痛歎に堪へざるなり余輩は必ずしも農家の転業を不可なりと云ふにあらず多数の中には時に或は転業のために大なる利益幸福を得ることもあるべし然れども翻て農業以外の職業を觀よ昼夜そるばんを握りて紅塵を浴びながら一室の中に倉違するも何の樂しきことがある亦役場の隅に踞まりて上官の鼻息を窺ふも何の樂しきことかある此に至て余輩は実に軽忽なる農家の胸中を知るア、農なるかな農なるかな余は趣味多く快樂大なる農業の生活を送らんとするものにくみせん軽佻浮華にして農業の真味を解する能はざるものゝ如きは決して吾が徒にあらざるなり農家諸君は何れにくみせんとするや

〔農業の快樂〕『文の千草』三八号）

忠次郎は農業の効用として「軀軀の強健」といふ実利的効用と、「自然の美」といふ美学的効用を強調する。特に、「自然の美」に取り巻かれた農業は「天を樂しむ」とされ、「俗界」と対比される。宮崎湖処子『帰省』（民友社、一八九〇年）が故郷の自然に仙境のイメージを重ね合わせたように、農業を取り巻く自然を美的に価値付けている。農業以外の職業は俗界にあるものとして否定的に描き出される。「役場」の仕事が否定的に言及されているが、名望家層の子弟が多かった「作文会」「文学攻究会」会員の中には、農業から役場書記に転じた者（五十嵐昌喜・伊藤喜一郎など）が複数いる。「農家諸君は何れにくみせんとするや」と二者択一をせまるこの文章は、仮想の読み手に向けられたものとはばかりは言えない緊張をはらんでいる。

三 「教化」とジャンル

こゝまで見てきた忠次郎の文章は、候文体や呼びかけ、問いかけといった対偶表現を多用しながら、読み手を説得しようとする話法にその特色がある。忠次郎は「主意」を「実践躬行」する文章を求めたが、それは読み手をその「主意」に同調させることを目指している。言い換えれば、自分の価値観を相手に植え付けようとする垂直方向のコミュニケーションを基調とした「教化」を志向している。現在残されている忠次郎の文章は論説文のほかに、教訓・寓話・「美文」・和歌・新体詩・小説・笑話がある。彼の多彩な文章は、先の文章が農業の利点を実利的な効用と美的な効用とに分けていたことに対応するように、そのいずれかに比重が置かれている。

- 実利的な内容は教訓に置きかえられる。
- 当地にははな火的人物あまた之有申候我等は決してはな火的人物にならぬ様いませざるべからず候
 - 積尊の如き大聖人すら二十九才までは雪山に苦行しキリストの如きも三十才に到るまではナザレと申僻村に蟄居したまへる事は御承知の通りに御座候私は誠に之れに感じ申候
 - 人間は三十四五才までは全く書生のつもりにて勉強せざるべからざる誠と存じ候若年にして八字ひげをひねりめかすは誠に此上もなき一大こつけひに御座候(中略)
 - 低き生活に堪ひ得るの人に非れば決して大事をなし遂る人には御座なく候

(「無名十題」『文の千草』三二二号)

このような候文体で書かれた教訓は、忠次郎の「教化」する文章の最も典型的なものであろう。しかし、このような直接的な「教化」は余

「教化」と「連帯」

白に書き込まれた評でしばしば揶揄の対象となった。この文章の評も、「感服致しました」という評の一方で、「口ハ云ハ易シ行ハ難シ」というまぜ返しの評もあった。これは、青年たちが文章力の向上を共に目指そうとした回覧誌という場に関係しているよう。「作文会」(文学政究会)は文章を互いに錬磨する同志的な集団だった。そこでは対等で水平的な関係が前提となる。「訓話」的な知識のように、文化資本の格差が会員間で明らかなる場合は、知識や書物の量という裏付けのもとに「教える」側と「学ぶ」側という垂直的な関係が成立し得るが、道徳的な「実践」では、同志の水平的関係に、師弟的な垂直的關係を持ち込むことは軋轢を生み出しかねない。それを意識してか、忠次郎の教訓は時折、微妙な調整を行っている。

余此頃(金もうけ)の新案を考(ま)ひ出せり諸君金満家たらんと欲せば乞ふ左の新案を一読せよ呵々

- ▲金満家となるに二種の逕路あり曰く外部よりかためたる富曰く内部よりかためたる富則ちこれ
- ▲外部より堅めたる富とは東京に於ける岩崎大阪に於ける松本の如きをいふ併し這は超世の思慮と数多の困難を経て之に僥倖の運命を加味せざるべからずこれ最も説き難き所たり茲に説かんとするは是にあらずして後者則ち内部より堅めたる富にあり
- ▲百円の月給を受けんよりは拾円の資金を投じて紙屑買となるに如かず
- ▲それ百円の月給は官吏に在りても相当の小髯にして属官に意張り散らすを得る地位にあり而して紙屑買は他人の軒下に腰をかゝめておさん殿や長松にさへぼん／＼云はれて汚なき物を取扱ふ世に所謂賤業者たるは勿論なり
- ▲然れども月給取にして収賄せざる限りは決して富者たる能はざるなり官吏にして蓄財したりと自慢するものあらば即ち自身か泥棒したりと自白すると撰ぶ所なきなり

▲然らば則ち富者として成功するのは百円の月給にあらずして拾円の資本にありと知るべきなり

▲われ蓄財の秘訣をこゝに語らん歟

○あさねすべからず○長談話を禁ず○来客あるも座敷に通すべからずなるたけ入口にて応接せよ○常に銀行貯金を怠るべからず○人が拳を堅めて己が頭をぶちあらば其の拳の痛からんと思ひて己が頭の痛きをわすれよ○心に快楽を得たしと思ふ勿れ○家庭の和楽を計れ○良妻を娶れ○腰をかゞめ頭を下げ人にお世辞を云ふは人より馬鹿にせらるゝに非ずして人を馬鹿にしてやるのだと思へ○頭は常に少しく低れ居るをよしとす○口は馬鹿にするもよし手は機敏にはたらくべし

(年代不明)

「(金もうけ)の新案」という書き起こしと「呵々」という表現から滑稽交じりの文章に見えるが、内容はむしろ教訓的である。「▲」で箇条書きになっている前半部は教訓の羅列のように見えるが、論理的に明らかになつていない。後半部は論説文を一連の短いフレーズに要約したものである。内容も蓄財の方法というよりは、独立自尊の理念を説いている。注目すべきは、この前半部が抽象的な思弁ではなく、「月給」取りと「紙屑買」という職業によって具体的な形象を与えられており、即物的に理解できるようになっているということである。

後半部の「○」で列記されている部分は文字通りの教訓であり、忍耐の徳を基調とした世俗的な処世術である。前半部と後半部のつながりが明瞭ではないが、前半の信念を保持して後半の処世をなせということであろうか。独立自尊の理念を具体的な短文の積み重ねで論理化して示し、それをふまえて教訓を列挙するという展開には、読み手を「教化」しようとする意図がうかがえる。

しかし一方で、この文章の書き出しは教訓に冗談めいた粋を与える。笑いとともな「遊び」として聞き流す余地が設けられているのである。

この文章の評は「富者たらんとするものは須らく之れを読み而して之れを實行せよ」⁽⁹⁾という教訓として受け止めたものと、「右の如くして富を得んとならば我は寧ろ安臥し天地自然の現象を楽しみて貧なる方却てませなり呵々」⁽¹⁰⁾という冗談めかした揶揄とに分かれた。近世期から教訓は滑稽に諷刺して語られる場合が多いが、この文章の冗談めいた書き出しと教訓的な本文の調子は乖離しており、書き出しの方に付けたりめいた感があるのは否めない。これは忠次郎の「教化」の意識と、会員の同意的な意識との微妙な緊張を緩和しようとしたわざではないか。

この文章では教訓が「月給」取りと「紙屑買」の行為に形象化されていたが、忠次郎は寓話も複数書いている。当初「無名十題」として教訓を列記していた連載は、ほどなく「一口物語」という寓話の連載に変更され、寓話二篇が残されている。

「犀と駱駝」(『文の千草』三八号)は、犀が人間に尊重される駱駝を羨むのだが、駱駝は人に奉仕する苦勞を語り、不幸は表からは見えないと論ずという話である。世間で活躍する人には外見からはわからぬ苦勞があり、かえって不幸であるという教訓が込められており、立身出世を軽率に夢見ることを戒める寓話である。また、「小猿と大猿」(『文の千草』三七号)は、母猿から胡桃が食用であることを聞いた小猿が胡桃を拾う。しかし、割り方がわからず「若き者が老いたる者の物語をきく程愚かなる事はあらず皆当にもならぬ事柄なり」と胡桃を投げ捨てる。大猿がそれを拾って石で割って食べ、小猿に「此世の中にては困苦と労働を経されば何物をも得難し」と説き聞かせるという話である。年長者の言をおろそかにする一知半解の軽率さと、忍耐と労働という徳目が寓話化されている。この二つの寓話では、地方にいて都会で成功している者を外見だけで羨むことの愚と、年長者の知をないがしろにすることが批判され、忍耐と労働という徳目が寓意として込められている。これらは、都会にあこがれる地方の若者の安易な出郷熱を抑制し、忍耐と労働を説いた彼の論説文の内容とも符合し

ている。⁽¹⁾

和歌や「美文」のような文芸テキストにも、地方滞留と忍耐・労働に関する寓意が込められていると見られるものが多い。

ともすれハ怠り安き人の世に

むかしかはらぬ鶏の声かな

〔『文の千草』三七号〕

「ともすれハ怠り安き人の世に」に、忍耐と労働を是とする忠次郎の、世の中に対する批判的な見方が投影されている。忠次郎の和歌は他の会員に比べて少ないが、叙景の和歌四首の中にこのような歌が交じる。次の和歌は、彼が編集した号の巻頭に掲げられた。

田の魚ハ暑さに死ぬる夏の日も

賤の少女は田草取るなり

〔『文の千草』三六号、一九〇一年六月一九日〕

酷暑の下での農民の労働は、先に挙げた夏の日の農作業をする「平民」を肯定する文章と通じる。さらに、「賤の少女」という田園ロマंचシズムを感じさせる形象がなされることで、地方での農業労働が美化されている。この歌は、彼の農本主義的な主張が和歌の形に結晶したものであり、彼の「教化」は美的な表現による読み手の「感化」という面も持っているのである。

新体詩にも、地方の生活に女を配するものがある。

▲月の夕

月の夕を笛吹きて。余りに喉の乾くより。水呑まんとて山の井を。尋ね来れば乙女子が月の光りに背きつゝ。立てる姿の床しきよ。

▲蚊遣草

「教化」と「連帯」

父ハ車にすがる身よ。母ハ家にて煙草巻き。父母共に稼げども。木綿かや買ふ代もなし。あはれ裏家の軒の端に。夜な／＼焚ける蚊遣草

〔『文の千草』三七号〕

一つ目の新体詩は、笛を吹いていたら渴きを覚え、山家の井戸でそれをいやそうとしたら月を背に乙女が立っていた、というものである。山中で芸術に興ずる男が乙女に出会うという、幸田露伴や泉鏡花の作品にも通じる情景である。山家の生活が芸術と乙女によって美的に彩られる一方で、二つ目の詩では、父母と同居する中で困窮の様が最後に「蚊遣草」へと抒情的に焦点化される。並列された二つの詩は、忠次郎の地方に対する認識の二つの局面、すなわち美しさと閉塞感に対応している。

しかし、忠次郎にとって地方生活の苦しさに耐え、美しいイメージで自らを癒やす行為は、立志の欲求を捨て去る隠遁ではなかった。青年の出郷熱をたしなめる理由は機が熟していないからであり、出郷そのものを否定してはいない。忍耐は単に労働に耐えるということだけではなく、好機到来まで耐え忍ぶことを含意していた。彼の次の「美文」は、そのような立志の意志の表明である。

何見ても春の月夜は面白き物よ仰ぎ見れば月は独り冷かに笑ひおのれの愚を嘲るもの、如し呼々汝ほど世に楽きものはあらじ幾百年ふればとて変ることなくうき／＼と下界を照し世の人に仰ぎめでられ只悠々閑々として日を過すことの羨ましきよ人世のはかなきこと今宵も知れぬ命を繋ぎ日々営々として些細の利を争ひ東へ馳り西へかけ泣きつ笑ひつする可笑さよされど月よ矢張り此世ほど面白きものはあらじ英雄まれ学者まれ精神一到何事かならざらん必ず得べしされば世の人々に仰がれ其名は万世まで朽ちずなか汝とかはることのあるべき汝を羨むまじなどて此活戦場に及ぶ

べき

嗚呼いかに余寒の厳しきことよいらざることの時を移したりいざ寝ぬらん月は如何に月はおのれに耻ぢてや一片の雲間に形をかくしぬ

〔春夜月を見て感ず〕年代不明

この「美文」の語り手は、春の月を眺め、下界の人に아가められつつ、その人々を冷笑しているような超然とした月に羨望を抱くが、「此世ほど面白きものはあらじ」と思い直し、「精神一到何事かならざらん」という精神論とともに、立身の「活戦場」である人の世を肯定する。忠次郎はここで人の世を傍観する者を「月」になぞらえ、「月はおのれに耻ぢてや」とその倫理的な敗北を示唆する。この立志の意志は、一九〇二年に渡韓して京城に遊学するという形で実現することになる。その経緯は明らかではないが、おそらく京城学堂にいた伯父勢八が関係していたのであろう。地方滞留の境遇から脱出する機会を、彼は逃すことはなかった。

四 文章による「連帯」

宇津木忠介は、忠次郎の弟である。忠介自身による「予の経歴（思ふべたる儘）」（『深山の花』二巻一〇号、一九〇三年一月八日）によれば、一八八一年一月出生。一八九六年喜多方高等小学校を卒業し、さらに下台（山都村）の水野鉄衛の下で一年間漢籍を学んだ。一八九七年一七歳の時、医師になることを勧められ、父母の下を離れて坂下町の医師高橋登の門弟となる。この頃「予ハ何かなし事なく日々遊怠度なく日を経過し却て悪魔の巢窟を索るに至れり或は妓と戯れ飲酒度なかりき」という放蕩を経験している。ために健康を害し、一八九九年一月帰郷した。福島病院に一ヶ月の入院の後、喜多方の猿橋塾で数ヶ月漢籍を学んでいる。その後、登記所に勤務することになった。

彼に転機が訪れたのは、高橋医師が神戸に転居する際に同行してからである。一九〇〇年四月に神戸フェースホーム英語塾に入学し、二年間英語と代数幾何を学ぶと共に、「普通の学科」の研究にも励んだ。一九〇二年関西学院の入学試験に合格する。「此時募集人員五名、志望者二十五名」であったという。関西学院では倫理学・宗教学に関心を持った。

忠介の投稿時期は大きく二期に分かれている。第一期は飄遊生の筆名で投稿していた一八九八年から一九〇〇年までの時期である。第二期は関西学院に入学後、椿堂の筆名で神戸から投稿した一九〇三年一月から一九〇四年一月までの時期である。

第一期は、医学生として坂下町に在住していた頃から、病で帰郷しさらに神戸に行くまでの時期である。高等小学校卒業後と帰郷療養後の二度にわたって漢学塾に通っていたこともあり、この時期の彼の文章は、普通文を中心とした漢文脈の文章が多く、白文も一篇のみある。ジャンルは論・記・説にほぼ限られ、他には懸賞課題に応じた和歌が五首あるのみである。論説文は「白虎隊紀念碑の設立を聞いて感を陳ぶ」（断片、年代不明）、「禁烟の論」（年代不明）など典型的な表現を用いた作文が多い。また、回覧誌内の懸賞課題にただ一人応じた「読書の快楽を論ず」（『文の千草』一六号、一八九九年六月三〇日）などもあり、この時期の忠介が、典型的な文章を書きながら作文力の向上に力を入れていたことがうかがえる。

学術研究会設立ノ概

在坂下 飄遊生

夫レ国ノ盛衰強弱安危ハ教育ノ如何ニ因テ以テ分ル、所ノモノニシテ教育之任ニ当ルモノハ其責任重ク且大ナリト云フベシ一度教育ノ宜シキヲ失ヒ、バ一ノ国家ヲシテ衰弱ナラシメ貧困ニ陥ル遂ニハ亡国ノ始末ヲ見ルニ至ルヤ必セリ抑々吾人等ハ斯之如キ重且ツ大ナル教育ノ任ヲ負荷スルモノニシテ豈一日モ忽諸ニ付スベケ

ンヤ其教育界ニ身ヲ沈ムルモノ須ラク不倫不羈独力独行以テ其責
任ヲ全フセザル可カラズ近時熟々教育界ヲ視ヘバ教育ヲ監査スル
所ノ学務委員其人ニシテ恐レ多クモ三大節ニ欠礼シ或ハ俗ニアリ
教員ノ悦ビヲ取ラント欲シテ濫リニ俸給ヲ加フガ如キモノ多々此
レナリ豈嘆ズルニ勝ユベケンヤ此ニ於テカ從來□濁セル教育社界
ヲシテ刷新セシメンガ為メ吾ガ村ニ一ノ学術研究会ヲ設立シ共ニ
学術智識ヲ研磨シ可相談論セント欲ス同志ノ諸君宜シク不肖等
ガ意ヲ賛シ愈々求会ラシテ隆盛ナラシメン事ヲ希フ
〔『文の千草』一八九八年推定〕

「在坂下」と記されているため、一八九八年の作であろう。檄文とし
て書かれているが、「教育社界」の告発には具体性がなく、いかにも
題目に即した作文という体裁である。ただし、忠介が「学術研究会」
を設立する呼びかけという題目を選んでいることには注意しておきた
い。第一期の文章には、特に交友について書かれたものが複数あるか
らである。「菊花ヲ観ルノ記」〔『文の千草』一八九八年推定〕は病氣
の熱で鬱々としていたところに友人から観菊に誘われ、酒を飲み詩を
吟じて共に帰るまでを書いたものであり、「秋山散步夢説」〔『文の千
草』一八九八年推定〕は、薬局勤務に鬱々としている中、友人に誘わ
れて杉山に散策に出かけて自然の美しさを堪能し、談話しながら共に
帰途につくが、それは夢であったというものである。どちらも友人が
訪ねてきて共に外出し楽しむというもので、あるいはこのあたりに彼
の坂下町時代の放蕩の痕跡が見られるのかもしれないが、訪問を受け
て外出し共に楽しむという交友は、一八九〇年代の文章や小説に頻出
する紋切り型でもある。忠介が記や説としてそのような関係を描いた
のに対し、「作文会」会員の風間悌三も同様の青年同士の関係を「美
文」や小説として書いていた。一八九〇年代の民友社や政教社を中心
とした青年同士の関係も対等な交友関係であり、また小説に目を向け
れば、坪内逍遙『当世書生氣質』（晩青堂、一八八五年〜一八八六年）

「教化」と「連帯」

の書生たちがすでにそのような関係にあった。このような青年たちの
対等な水平的関係を、忠次郎や菊池の垂直的な「教化」の関係に対し
て、「連帯」の関係と呼ぶことにしよう。この関係性は、忠介の第二
期の文章を特徴付けるものになる。

五 「連帯」の条件としての議論

一九〇〇年から一九〇一年の「作文会」は危機的な状況にあった。
一八九九年には菊池が、一九〇〇年には風間が応召したことで、会の
中心人物が不在となってしまったのである。一九〇〇年四月には忠介
はすでに神戸にいたが、会費領収簿には同年六月まで会費納入があっ
たことが記されている^(忠)。しかし、回覧誌を予定通り発行できなくなっ
たためか、他の会員と共に一ヶ月分の会費が返却されている。そのま
ま忠介の回覧誌への投稿は途絶え、会費領収簿からもその名が見えな
くなる。正式な退会ではないが、他郷にあって会の活動から離れるこ
とになった。

忠介の投稿が復活したのは、一九〇三年一〇月の『深山の花』二巻
一〇号からである。号も椿堂と改めた。「作文会」は前年一月に兵役
を終えて帰郷した菊池の尽力によって「文学攻究会」として再出発し
ており、一九〇三年一月には風間も兵役を終え帰郷した。一方で、彼
らが不在の間に会を支えた一人だった忠次郎は、一九〇二年に出郷渡
韓のため退会していた。そのような中、忠介に再び参加の誘いがあっ
たようである。一九〇四年一月に「僕深山の花諸君に紙上に見てよ
り既二六ヶ月」（『新年ノ辞』『深山の花』三巻一号）という記述があ
り、一九〇三年の六月頃から回覧誌に参加して評などを書き込んでい
たらしい。第二期の初投稿である「予の経歴（思浮べたる儘）」の冒
頭に「文の舎主人より（中略）予二経歴ヲ寄せヨ」とあり、風間
（文の舎主人）からの投稿依頼がきっかけだった。

忠介の第二期の文章は第一期とは様変わりしていた。

・歳暮ニアタツテ別ニ特筆大書スベキヲナシ然レドモ今思フガ儘
筆ニ任セテ書カン

四月流水ノ如クトカ日月ハ白駒ノ燎ヲスグルガ如シト此レ人口ニ
膾炙シテ居ルナリ緑愈々濃ヤカニ翠緑ノ滴ラントスルマタ百花野
辺ニ競ヒテ小蝶ノ舞ニモ諸鳥ノ啼キシモ実ニ昨日ノ感アリ然ルニ
只一睡夢裡ノ間ニスギ去レリ

四顧今ヤ早ヤ昏睡ノ状ヲ呈シテ寂寞タル天地ニ化セリ北風ハ身ニ
迫ル僕等ノ如キノ貧書生輩ハタメニ囊中寒クホコタタル焼芋サ
ヘモ食スル事ノ得ザルハ悲シ

然リト雖モ新年ニハ汁子餅ノ一二盃ハ口ニ入ルナラント楽ミ居レ
リ呵々

〔歳暮ニ際シテ思ヒ出ヅル儘〕『深山の花』三巻一号、一九〇四
年一月二五日）

第一期の頃の文章は文章修行のための作文という性格が強く、明確な
ジャンル意識の下に書かれていた。一方、この文章は「思フガ儘ニ任
セテ」書かれた文章になっており、ジャンルは判然としない。

最初は「四月流水ノ如ク」「日月ハ白駒ノ燎ヲスグルガ如シ」といっ
た漢文由来の句を対句にしており、漢文脈の文章作法に沿っている。
次に「翠緑」と「百花」の色彩の対照と、「小蝶」の舞と「諸鳥」の
啼声という視覚と聴覚の対照をやはり対句的に連ねながら、今度はそ
れらを「実ニ昨日ノ感アリ」という話者の個人的な感覚に落とし込む。
そのように季節の移り変わりを自分の感覚に移した上で、「ホコタタ
ル焼芋」「汁子ノ一二盃ハ口ニ入ルナラン」と、寒さに向かう中での
貧書生の欲求をオノマトベなどを用いながら、ざっくばらんに表現す
る。そして最後は「呵々」とその境遇を笑い飛ばす。漢文脈の対句的
表現に従いつつ、決まり文句から自己の感覚へと徐々に移行し、最後
は等身大のくだけた物言いである。また、この引用は文章のごく一部であり、全体はかなりの長文である。忠介の第

二期の文章は概ね長く、簡潔な達意の文章というよりは、時にくだけ
た調子を含む冗舌な文章であり、口語文もある。書体も、第一期の大
きく太い楷書体から、細い線の自由なくずし書きに変わった。これは、
木村直恵が一八九〇年代以降の青年の文体として指摘する、いわゆる
「かきながし」の文章と言ってよいだろう。つまり、忠介の第一期か
ら第二期の文章の転換は、「修辞性によって文章そのものが屹立して
いるような文章」から「文章よりも内容のほうが浮き出ているような
文章」への転換である（14）と見ることが出来る。「内容のほうが浮き出
ているような文章」とは、書き手の思考や感情が修辞よりも前景化され
る文章である。それはたとえ文語体であっても、はしばしに破格が認
められる文体となる。そしてそのような文体の使用が許されるのは、
垂直的な階層関係の中ではなく、水平的な友人としての関係の中であ
る。

君等は前途有為の士だ今後も常ニ怠らず励み勤むるならば成功は
期して得らるゝや難からず今や池の中に住むと雖も何ぞ素養を貯
ふべきの時代である他日若し君等池の中より出で活動するの季至
らば宇宙を呑むニ至るや必せり此ニ於てか深山の花ハ閑柴のもの
でなく耶麻郡否岩代否日本否世界のものとして知らるゝニ至る事
を予ハ信ずるのだ実ニ愉快／＼知らずや人智の無限ニ発達進歩す
る事を予の身は千山万水隔つとも深山の花紙上に於て相共ニ見ゆ
るのだ……其れ共ニ手を拓るの時ハ……活舞台に立つの日を……
かく期して大ニ腕を研磨して待つべきだ

〔予の誓言苦語に対して評せられし最愛なる弟柳月香雪小言言太
郎に応て以て会員諸氏に及ぶ〕『深山の花』二巻一〇号、一九〇
三年一月八日）

忠介にとつて『深山の花』とは、閑柴に滞留している会員がやがて
『世界』へ飛躍するために素養を蓄積する場である。そして遠く離れ

た神戸にいる忠介も、志を共有している。回覧誌とは、関柴と神戸という異なる場にいる者たちが、志を同じくして「相共二見ゆる」場なのである。故郷に滞留している会員たちと、すでに出張遊学を果たしている忠介との間の国内における格差は、「世界」というより広い舞台を設定することによって無化され、水平的な「連帯」関係へと反転する。また、この文章は口語文体によって書き手の思考や感情がより前景化している。書き手の心情の直接的な表現が誠意ある言葉として伝わる可能性を持つような文体が、格差を共同性へと反転させる鍵になる。

忠介はそのような水平的関係を可能にする場を、さらに意識的に構築しようとする。

先二可香君予二三冊の深山の花を送つた其れで予ハ大二暴評を加へたのであるまた九号ニは置言苦語と題して種くなる事を書き並べたけれど之なる一ハ君等の眠を醒さんがため一ハ君等の思想いかにと探知せんがため一は深山の花をして益々光明の位置に達せしめんがため打撃を与へたのである(中略)時ニ余り反対するの諸氏のなかつた事に愕いた否寧ろ諸君の勇氣なきに慨嘆せずんばあるべからずとなつた(中略)何だ君等も青年ではないか将来第二の国民として国家を□るべき大なる責任のあるものでないか眠りて可なるか否く其れ大ニ要素を貯ふべき時季である其れ糧を得るの時代でないか糧いかにして得らるゝか働き且つ活動して得るのである其れ君等義のためとならば大ニ喧嘩セヨ相手なくば僕でも及ばずながら相手とならむ遠慮する勿れ敵を何程でも得られるのだ

(同右)

忠介がここで会員たちに求めているのは、議論する姿勢である。素養を蓄積するには、議論による「青年」間の切磋琢磨が必要なのである。

「教化」と「連帯」

たしかに批評やそれに対する反論自体は、すでに余白の評を通してなされていた。『深山の花』では、それらの評を編集員が後に列記して掲載する欄も設けられるようになっていた。しかし、ませ返しや軽口が含まれる雑駁な批評の場とは異なる議論の場を、忠介は提唱しているのではないか。それは「義」のために「喧嘩」する場、すなわち公論の場である。しかしこの公論の場は誰にでも開かれているわけではなく、「青年」という同質性を仮定された成員によって専有された場なのである。忠介は神戸、特に関西学院という「青年」たちの同質的空間に身を置いていた。第一期の文章に見られた交友が、立身出世に向けた修養という目的のもとに再構成されたのが、「青年」たちの議論の場における「連帯」の関係だったのではないか。そのような同質性を前提とする場では、忠次郎が行っていたような「教化」のためになされる多様なジャンルの工夫は、「連帯」の基盤となる対等な関係をないがしろにする行為と映るだろう。

しかし、関柴と神戸の格差を想像的に解消してしまうような「青年」という虚構とそれに基づく対等な議論の場とは、たやすく共有されるものではなかった。例えば、忠介より年少の縁戚である宇津木多一は、この文章に次のような評で応答した。

先号ニ香雪トシテ評シタルコトハ(中略)却テ親睦ノ期ヲ待チタルニアリ故ニ君深山ノ花ニ於テ評スルハ或ハ怒リ或ハ笑ヒ共ニくスクスル内ニ其ノ目的タル文学思想ノ発達ノ期ヲ向フルナルベシ但シ彼ノ評ハ君ノ識見ヲ探知スルニアリ素ヨリ君ノ識見ヲ知ラザルニアラザレド文明ノ極ト称セラル、神戸ノ関西学院ニ学ビ給ヘバ如何ニ君ノ識見ガ高マリタルカヲ然ルヲ右ニ掲記ナサレタ句ヲ見テ実ニ其ノ念頭ノ高尚ト思想ノ確実ニ感服ノ外ナシ

多一は、以前に忠介の文章を批評していた。先の忠介の文章の後半には、それへの応答が含まれていた。多一はこの忠介の応答に対して、

議論を突き詰めることを避けてしまふ。そして、先の批評は関西学院に通う忠介の知的優位を確かめるためだったと弁解し、忠介の知的優位に「感服」するのである。地方と都会の文化的格差の認識が、多一にこのような行為をうながしたと考えるべきだろう。しかし、これは回覧誌を公論の場として考えようとしていた忠介にとって望ましい反応ではなかった。彼は「香雪兄ヨ評恐ル、勿れ何ぞ僕に對して辨解したる僕は君等の評多からむ事を望む然れども其評するや文意の如何を知りて評せヨ」(第二卷第十号に掲げたる英語を訳して)『深山の花』二卷一二号、一九〇三年一月推定)と述べて、多一の弁解を無用とし、さらに漫罵ではなく「文意」を理解した上での批評を求めた。忠介の意見を肯定する際に、垂直的な「教える」側と「学ぶ」側という「教化」の関係性が生成することへの警戒であると同時に、議論が感情ではなく知的な理解のもとになされなくてはならないという原則を確認している。

一方、地方と都会の会員の「連帯」を否定する会員もいた。会費の領取などの裏方に徹し、教員から役場書記になった伊藤喜一郎(号は藤の舎など)もその一人である。肝煎家に生まれた彼は、後に関柴村の収入役を長年務めることになる。役場書記に移動した段階ですでに生涯関柴にとどまることを期していたと思われ、また、彼の新体詩にも農本主義思想と農村讚美が見られる。彼は忠介と多一に對し、「滑稽云ふな……また香雪君の評も滑稽だ」と全く評価しなかった。

忠介の実弟定衛も反発した一人である。定衛は多一の評の上に次のような評を書き加えた。

香雪君ノ此ノ言余少シモ感服セヌ神戸ニ居ツタカラトテ関西学院
デ学ブカラトテ如何シテ高尚又ハ思想ガ確實ダト云フコガ出来ヤ
ウカ

神戸や関西学院で学んだ者を特別視しない対等な立場の表明といえる

が、「青年」の「連帯」を肯定しているわけではない。定衛も忠介と同様に、多一の「感服」に都会の文化的優位への安易な追従を読み取っているが、忠介にも文化的優位に依拠した「教化」の意識があることを鋭敏に嗅ぎ取っている。定衛の評は地方と都会の断絶と、都会に對する対抗意識が前景化された文章と見ることができよう。忠介もまたそのような定衛の意識を感じ取った。この評に對して彼は「然りく恐れ入りました僕は元来平凡なものだ柳月君また如何ニ……を評するの……あるや否」(第二卷第十号に掲げたる英語を訳して)と、自らを「平凡」としつつ、定衛も自分の「平凡」さを棚上げて自分を評していることをほめかしている。互いの対等な立場を同質性へと再び措定し直そうとした応答である。

定衛は当時、それまで勤めていた小学校教員をやめ、帰農せざるを得ない状況になっていた。おそらく実家の農業に従事していた長兄忠次郎の京城遊学が大きく関わっていたであろう。京城と神戸で遊学する兄たちに對して、定衛は地方に滞留する立場を強制されたと感じていたようである。兄弟の出郷による直接的な影響をこうむった定衛にとつて、格差を無視した「連帯」の呼びかけは、そのまま肯定的には受け止められなかった。

この時期に定衛は「憂慮生」という筆名で厭世的な文章(「八月三日の夕ぐれ」、『深山の花』、一九〇三年八月二〇日投稿。原文散逸)を投稿していたらしく、それに対する忠介の評のみ残されている。

「弟ヨ定衛ヨ、汝何ゾ斯克モ憂慮セシヤ何ゾ仏的言ヲ発スルヤ何ゾ厭世的ナルヨ仰イデ天空ヲ望ミ伏シテハ地ヲ見ヨ、天ニ日月星辰ノキラメクヲ見ルナラン地ニ種々ナル花ヲ開クヲ見ルナランスクノ如ク少サキ花ハ何ノ為メニ咲キツ、アルカ其レ人生トハ如何余ハ汝ニヨクく説カント欲ス然レドモ此紙面ニ書クヲ得ズ後日ヲ期シテ申サン其レ之レヲ沈黙セヨ」(『深山の花』一九〇三年九月以降推定)。忠介は弟の厭世的な文章をたしなめつつ、誌上という公論の場ではなく、私的な場に對話を移さざるを得なかった。格差の中で直接的に負債を負わさ

れた者を、同質性を基にした「連帯」を前提とした公論で説得することとは困難であった。

六 「実践」のゆくえ——結びにかえて

さて、ここまで「作文会」「文学研究会」で「実践」を重視した二人の会員、宇津木忠次郎・忠介兄弟の文章を、文章による会員への「実践」の働きかけを中心に分析してきた。同じ「実践」志向であっても、二人の文章は対照的であった。

忠次郎は、「教化」を目指す文章を書いた。それは「教える」側と「学ぶ」側という垂直的な関係性をモデルとしていた。「教化」の文章は、伝達するための手段として多様なジャンルの文を駆使した。それは「教化」するべき相手の他者性が前提となっている。

しかし、回覧誌という場合は、同世代の男性が共に文章の向上を目指すという、水平的な同志的関係を基盤にしており、「教化」の垂直的な関係と軋轢を起しかねないものであった。それゆえに忠次郎の文章の一部は、水平的な関係に配慮しつつ「教化」するという両義性を持つことになった。

忠介は、交友関係を基盤とする「連帯」を志向していた。これは「青年」の同質性を前提とした水平的な関係性をモデルとしていた。「連帯」の文章は、修辭の自動律が後景に退き、代わりに個人の思考や情念が前景化するような、破格の文語体や口語体によって書かれた。忠介は、文章の型や修辭によってコミュニケーションのスタイルを用途別に類型化することで個を賭ける領域を縮減するような文章から、型を持たない代わりに個の関与が全面的に問われるような文章へと、自分の文章を劇的に変えた。

しかし、会員と忠介の間に横たわる地方と都会の文化的格差の中で、「連帯」を呼びかける彼の文章は、地方に滞留する会員たちにはそれ自体文化的優位に則った「教化」に見えた。彼が同質性に基づいた公

「教化」と「連帯」

論の場として期待した回覧誌も、そのような格差をめぐる情念によって、公論の場としては機能不全に陥らざるを得なかった。格差を無効化する「連帯」の実現は、実質的な格差の前に頓挫した。

両者の「実践」志向の文章を通じて中心的話題になったのは、地方に滞留するか出郷するかという問題だった。これは「実践」が立身出世と分かちがたく結びついていたからである。地方の青年にとって立身出世とは、都会に出て学び、そして成功することだったからである。しかし、地方の文章回覧誌が我々に示すのは、その困難あるいは不可能であり、それに直面した青年たちの複雑な情念と思考の痕跡である。「作文会」「文学研究会」の回覧誌上には、出郷者あるいは出郷を目指す者と、地方にとどまることを選択あるいは強いられる者との間の、「青年」同士の共感の共同体とばかりは言えない分断がある。そして回覧誌上で交わされる文章には、単純に割り切れない情念の微妙なひだが表現としてうごめいている。

最後に忠次郎と忠介のその後についてふれておく。

忠次郎が一九〇二年に渡韓し京城に遊学したことはすでに述べたが、どこで学んでいたのか、伯父勢八とどのような関係にあったのかはわからない。定衛が渡韓後の忠次郎の新体詩を回覧誌上に投稿している。

野末の河も利根川も 四海の水に異ならず
貧しき者もとめる身も世界の人ぞ神の子ぞ
万雷吠えて岸を嘯み 舟も□らず人行かず
流れに向ふ者もなく 岩切り通し行く水の
大声叱咤鞭を上げ 砂のけむりを後にして
都大路に馬車をかゝる 貴き人に似たる哉
吾羨まし我が水は 苔の思につゝまれて
珠なす汗と涌出でつ 松が根潜り岩を避け
木の下蔭に埋れて 音も幽に流るれど
流は清く濁無し 泉はつきず海に入る

百千の川を集め来て 流れを強み瀬を早み
大河の姿見よやとて 濁流激し行く水の
民の膏血絞り来て 我家は高し庭闊し

飢えたる者よ平伏せと 驕れる人に似たる哉 (中略)

栄華の都跡も無し 名も無き川の水なれど

誰ぞや千尋の底暗く 我が足下に黙せるは

百千の川を集め来て 流れも汚れ行きし時

野末の河と利根川と 貧しき者と富める身と

四海の水に神の子よ 神の姿に誰が似たる

(断片、年代不明)

貧しい者を「野末の川」の細くも清い流れに、富める者を「利根川」の濁流にたとえるこの詩は、地方と農夫を道徳的優位に置いたかつての論理と変化はない。ただ、朝鮮という場でこの詩は誰に向けて書かれたのか、今のところ知るすべはない。貧しい朝鮮の人々にひたむきに同情した乗松やそれを助けた勢八と同じ伝道の道をたどったのだろうか。しかし、キリスト同信会の資料には今のところ忠次郎の行方を示す資料は見当たらない。

むしろキリスト同信会に名を残したのは神戸にいた忠介だった。キリスト同信会の通史である『恥はわれらに ほまれは神に キリスト同信会の一〇〇年』(同信社、一九八九年)には、勢八ら「初期」の伝道者に続く「二代目伝道者」の中に「宇津木忠助」を数えている。

忠介はまた、福島県山都出身の連沼門三⁽¹⁾が結成した修養団の団員となつて積極的に活動した。北海道江差の白樹小学校の教員になり、修養団の江差支部を起ち上げている。修養団は社会教育団体であり、宗教や政党などにこだわらない横断的な社会教育団体であった。キリスト同信会と同様に水平的な同志的關係が基盤になっており、伯父の勢八は修養団の中心人物の一人でもあった。忠介は機関誌『向上』にも「たびたび熱烈な檄文を投稿した」⁽⁸⁾。忠介は常に水平的な「連帯」關係に

コミットし続けたようである。

注

(1) 「作文会」『文学攻究会』資料は福島県立図書館が主に所蔵している。

本稿の資料はすべて「深山の花」(L9105/M7/1)として一括登録されている。資料の概要については「明治期地方文章会の活動(一)」——福島県喜多方市「作文会」『文学攻究会』概要——、『大妻女子大学紀要—文系—』五一号、二〇一九年三月で報告した。なお、断片化した資料は他の資料と対照しつつ、可能なかぎり掲載年月日の推定を行った。

(2) 木戸雄一「文章修行の中の『文学』——地方文章回覧誌と「訓話」志向——」、『日本近代文学』一〇一集、二〇一九年一月

(3) 「会員名簿会費領収簿 明治三十一年十月以降」

(4) 齋藤希史「国家の文体」、品田悦一・齋藤希史『「国書」の近代 近代日本の古典編成』、新曜社、二〇一九年

(5) 土肥昭夫『日本プロテスタント キリスト教史』、新教出版社、一九八〇年、一九九七年四版

(6) 飯沼二郎・韓哲曦『日本帝国主義下の朝鮮伝道』、日本基督教団出版局、一九八五年。『恥はわれらにほまれは神に キリスト同信会の一〇〇年』、同信社、一九八九年。大野昭『乗松雅休覚書』、キリスト新聞社、二〇〇〇年

(7) 都会を悪と見て故郷で修行するか、善と見て出郷を勧めるかの議論は『穎才新誌』では頻繁に行われた。次の文は出郷賛成派が反対派の文章を紹介したものである。

撰陽氏ナル人アリ、本紙七百九号ニ、都門ノ游学テフ題ヲ掲ケ、其意略言セハ左ノ如シ、「都門ニ游学セハ悪魔ノ為メニ精神ヲ奪ハルレハ危フシ、故ニ必ス学業ハ郷里ニ於テ成功シ、後チ都門ノ戦争場ニ出ヨト、」

(林善雄「都門ノ游学」『穎才新誌』七二二号、一八九一年三月二二日)

(8) 錦龍生「文明人論」『文の千草』、掲載時期不明。「錦龍生」は初期に

忠次郎が使用した筆名。

(9) 春峯（風間悌三）の評

(10) 可香（菊池研介）の評

(11) 「犀と駱駝」の裏には次のような文がある

しかし天運到らず確信なきに只自己の志望より軽くしく動く時は決してよき運命は来るものに御座なく候されど世の中には此理を考へず家をはね出し先祖よりの遺存物をも売り払ひたかにしたる田舎官吏になるものあまた之有申候誠になげかはしき次第に御座候申上ぐるも御座なく候へ共何事をなすにも其成すべき素養なきにさわぎ出すは間違ひに御座候

(12) 「会員名簿会費領収簿 明治三十一年十月以降」

(13) 木村直恵『青年』の誕生 明治日本における政治的実践の転換、新

曜社、一九九八年

(14) 木村 前掲書

(15) 伊藤は次のような新体詩を投稿している。自然を見て厭世的な感慨にふける詩人を否定し、科学によって自然を理解し農夫の生活に自足するさまがうたわれている。

農夫の歌

流るゝ水を悲しみて 人の行衛を思ふとは
散り行く花に吊ひて 人の命を惜むとは
そは愚なりうつけなり 理り知らぬ詩人哉
水は低きにつくものを 流るゝこそは真なる
科学の智識君あれ 何に徒に歎かんや
夜更け戸外の音かして 夢驚かす事あれば
そは窃人と怖ち惑ひ 光りもなくてうかゝへる
人はかくても疑ひの 嫉の体か厭はしや
嗚呼酔はん哉酔たほれ 赭ら顔していぬるとき
夢さへなくて世を忘れ 身をも忘れて無我に入る
自然の寵児こゝにあり 世人笑ふもいとほんや
農夫夕に家に来て 濁れる酒か盃を
口をふくみて歌ふとき 平和の神は舞ひるなり

君見よ畑は色つきて 収穫近くなりにけり

〔深山の花〕二巻五号、一九〇三年五月二日

(16) 木戸「文章修行の中の「文学」」

(17) 『連沼門三全集』一〇巻、修養団、一九六九年

(18) 『連沼門三全集』一〇巻